

案頭の書

芥川龍之介

青空文庫

一 古今実物語

一

大阪の画工北^{ほく}璿^{せん}の著はせる古今^{ここんじつもの}実物語^{がたり}と云ふ書あり。前後四卷、作者の筆に成れる挿^さ画^{しゑ}を交^{まじ}ふ。格別^{きかくしよ}稀^き覲^{かう}書^{しよ}にはあらざれども、聊^{いささ}か風^{ふう}変^がりの趣^{おもむき}あれば、そのあらましを紹介すべし。

古今実物語は奇談二十一篇を収む。その又奇談は怪談めきたれども、実は少しも怪談ならず。たとへば「幽^{にぐわ}霊^{つだう}二月堂^{ごわう}の牛王^{ごわう}をおそるる事」を見よ。

「今西村に兵右衛門と云へる有徳なる百姓ありけるが、かの家

にめし使ふ女、みめかたち人にすぐれ、心ざまもやさしかりけれ

ば、主の兵右衛門おりおり忍びかよひける。此主が女房、妬ふか

き者なるが、此事をもれ聞きて瞋恚のほむらに胸をこがし、奴を

ひそかにまねき、『かの女を殺すべし、よく仕了せなば金銀あま

たとらすべし』と云ひければ、この男も驚きしが、元来慾心ふか

き者なれば、心安く受合ひける。(中略) 下女 (中略) 何

心なくあぜづたひに行く向うの方、すすきのかげより思ひがけ

なく、下男横だきにして池中へなげ入れける。(中略)

「日も西山にかたむき、折ふししよぼく雨のふるをいとはず、

夜歩きをたのしみにうでこきする男、曾我宮へ日参。此所を

通りけるに、池の中より『もしもし』と呼びかくる。誰ならんと
 立ちどまれば、いぜんの女池の中よりによつと出で、『男と見か
 け頼み申し度き事あり』と云はせもはてず、狐狸こりのしわざか、人
 にこそより目にもの見せんと腕まくりして立ちかかれれば、『いや
 いやさやうの者にあらず。我はいまにしむら今西村の兵右衛門へいゑもんに奉公致すも
 のなるが、しかじかのことにてむなしく成る。あまりになさけな
 きしかたゆへ、怨うらみをなさんと一念此身をはなれずこよひ今宵かの家に
 ゆかんと思へど主あるじつねづね観音を信じ、門戸もんこに二月堂にぐわつだうの牛王ごわうを
 押し置きけるゆゑ、死しりやう霊の近づくことかなはず（中略）牛王を
 とりのけたまはらば、生々しやうじやうせぜ世々ごおん御恩』と、世にくるしげ
 にたのみける。

「かのもの不敵ふてきのものなれば（中略）そのところををしへたまへ。のぞみをかなへまゐらせんと、あとにつきていそぎゆく。ほどなく兵右衛門が宅になれば、女の指図さしづにまかせ、何かはしらず守り札ひきまくり捨てければ、女はよろこび戸をひらき、家へ入るよと見えしが臥ふしてゐたる女房ののどにくひつき、難なくいのちをとりにて、おもてをさして逃げ出でける。（中略）

「女走りいでゝ（中略）此上ながらとてもものことにいづくへなりと連れてゆきたまはれと、背につきはなれぬうち、家内かないにわかになさわぎ立ち、やれ何者のしわざなるぞ、提灯ちやうちん松明たいまつと、上を下へとかへすにぞ、以前の男も心ならず足にまかせて逃げゆきしが、思はずもわが家にかへり、（中略）ひとり住みの身なれば、

誰れとがむるものもなけれど、幽霊を連れかへりそゞろに気味わるく、『のふくのぞみはかなひし上は、いづかたへもゆきたまへ、（中略）』と、心のうちに念仏をとなへけるこそをかしけれ。「幽霊もしばしはさしうつむきてゐたりしが、（中略）怨めしと思ふかたきをかみころし、一念散ずるときは泉下^{めいど}へもゆくべきに、いまだ此土^{このど}にとどまることのふしんさよと心をつけて見るに、さして常にかはることもなし。（中略）それより一つ二つとはなし合ふに、いよく幽霊にあらざるにきはまりける。（中略）男も定まる妻もなければと、つひ談^{だん}合^{がふ}なりてそこを立ちのき、大阪にしるべありてひきこしける。兵右衛門^{へいゑもん}がかたにはかゝることゝは露しらず、本妻と下女^{げぢよ}が修羅^{しゆら}の苦患^{くげん}をたすけんと御出家^{ごしゆつけ}がた

の金儲けかねまうとなりけるとなり。」

この話は珍ほくせんしき話にあらず。鈴木正三すずきしやうざうの同一の怪談を発見

し得べし。唯北ほくせん璿はこの話に現実主義的な解釈を加へ、超自

然を自然に翻ほんやく訳したり。そはこの話に止とどまらず、安あんちん珍清きよひめ姫の

話を翻訳したる「紀州日高の女山きしうひだか伏を殺す事」も然り、葛くずの葉は

の話をを翻訳したる、「畜類人と契ちぎり男子をのこを生む事」も然り。鉄輪かなわ

の話をを翻訳したる「妬女とぢよきぶ貴布禰ねみ明神やうじんに祈る事」も然り。殊に最

後の一篇は嫉妬おにの鬼にならんと欲せる女、「こは有ありがたきおつげ

かな。わが願ぐわん成じやうじゆ就しゆとよろこび、其ま川へとび入りける」も、

「ころしも霜しもつき月下旬の事なれば、（中略）四方よもは白たへの雪に

うづみ、川風はげしくして、身体しんたい氷にとぢければ、手足もこご

へ、すでに息絶^{いきた}へんとせし時、「いつしか妬心^{としん}を忘れしと云ふ、誰かこの残酷^{ざんこく}なる現実主義者の諧^{かいぎ}謔^{やく}に失笑一番せざるものあらん。

二

更に又「孝子黄金^{こがね}の釜を掘り出し娘の事」を見よ。

「三八^{さんぱち}といへる百姓は一人の母^{ひとり}につかへて、至孝ならぶものなかりける。或年^{あるとし}の霜月^{しもつき}下旬の頃、母^{たけのこ}筍^{こじ}を食し度^{たま}由^{よし}のぞみける。もとより貧しき身なれども、母の好みにまかせ、朝夕^{あさゆふ}の食事をととのへすすむといへ共^{たけのこ}この筍はこまりはてけるが、（中略）蓑^み

のかき

笠ひきかづき、二三丁ほど有所の、藪を心こころあて当ゆきに行ける。積

くちば

る朽葉につもる雪、かきのけくさがせども、（中略）ああ天我

なみだ

そで

ぜひ

をほろぼすかと泪と雪に袖をぬらし、是非なくくも帰る道筋、

なほ

こをけひと

縄からげの小桶壺つ、何ならんと取上げ見れば、孝子三八に賜る

たまは

と書付はなけれ共、まづ蓋ふたをひらけば、内よりによつと塩竹の子、

かね

金もらうたよりうれしく、（中略）女房にかくとしらすれば、同

しうとめ

かつを

あつもの

じ心の姑思ひ、手ばやに塩だし鰹かき、即時に羹となしてあたへ

なま

ける。其味生なまなるにかはる事なく、母もよろこび大方おほかたならず、

なる

ひと

いか成人のここに落せしや、是又壺ひとつのふしぎ也。

かせ

「しかるにかほど孝心厚き者なれ共、拵かげばかせぐほど貧しく成

あさゆふ

り、次第くゝに家をとろへ、今は朝夕あさゆふのけぶりさへたえ／＼

に成りければ、三八女房さんばちに云ふやう、（中略）ふたりが中にま

うけし娘ことし十五まで育てぬれ共、（中略）かれを都の方かたへつ

れ行き、勤奉公つとめぼうこうとやらんをさせ、給銀きふぎんにて一ひと持かせぎして見

んと思ふはいかにと尋ぬるにぞ、わらはも疾とくよりさやうには思

ひ候さふらへ共、（中略）と答へける。（中略）三八は身ごしらへして、

娘うちつれ出でにける。名にしおふ難波なにはの大おほみなと湊まづ、先此所へと

心ざし、少しのしるべをたずね、それより茶屋奉公にいだしける。

（中略）扱さて此娘、（中略）つとめに出いづる其日より、富豪の大臣か

かり、早速さそくに身うけして、三八夫婦母おやも大阪へ引きとり、有

りしにかはる暮くらと成り、三八夏は蚊帳かやの代りにせし身を腰こしもと元共

に床とこを扇あふがせ、女房は又姑しうとめにあたへし乳房ちぶさを虎屋とらやが羊羹やうかんにしか

へ、氷から鯉こひも古めかしと、水晶の水舟みづぶねに朝鮮金魚を泳がせて
 楽しみ、是これ至孝のいたす所なり。」

天は孝子に幸福を与へず。孝子に幸福を与へしものは何人なんびとか
 の遺失せる塩竹の子のみ。或は身を売れる一人娘ひとりのみ。作者の俗
 言を冷笑するも亦また悪辣あくらつを極めたりと云ふべし。予よはこの皮肉な
 る現実主義に多少の同情を有するものなり。唯唯作者の論理的頭づ
 脳なうは残念にも余り雋しゅんえい鋭ならず。「餓鬼聖靈会がきしやうりやうゑを論ずる事」
 の如き、「寺僧病人問答の事」の如き、或は又「仏者と儒者渡とたう
 唐天神てんじんを論ずる事」の如き、論理の筆を弄ろうしたるものは如何いかに
 鼻屑眼ひいきめに見るにせよ、概ね床屋の親方の人生觀を講釈すると五十
 歩百歩の間かんにあるが如し。因ちなみに云ふ。「古今実物語ここん」は宝曆二はうれき

年正月出版、とけいぜん土岡然の漢文の序あり。書肆は大阪南本町一丁目
むらゐきたらう村井喜太郎、「古今百物語」、「当世百物語」号と同年の出版な
 りしも一興ならん乎。か

二 魂胆色遊懷男

「こんたんいろあそびふところをとこ魂胆色遊懷男」はかの「まめをとこえどけんぶつ豆男江戸見物」のプロ

トタイプなり。予の家に蔵するは巻一、巻四の二冊なれども、大
めゑもん豆右衛門の冒険にはラブレエを想はしむるものなきにあらず。

大豆右衛門は洛東山科らくとうやましなの人なり。その母「塩の長次ちやうじ」には

あらねど、夢中に馬を吞むと見て、懷胎したる子なるゆへ」大豆

右衛門と称せしと云へば、この名の由よつて来る所は必しも多言す

るを要せざるべし。大豆右衛門、二十三歳の時、「さねかづら取

りて京の歴々の女中方へ売べしと逢坂山あふさかやまにわけ登り」しが、偶

ぎよくばう
玉貌ぎよくばうの仙女せんぢよと逢ひ、一粒いちりふの金丹きんたんを服するを得たり。

「ありがたくおし頂きてのむに、忽ち其身雪霜の消ゆる如くみぢ

みぢとなつて、芥子人形けしにんぎやうの如くになれり。」こは人倫まじはの交りを

不可能ならしむるに似たれども、仙女の説明する所によれば、

「色里いろざとにても又は町家の歴々の奥がたにても、心のままにあは

れるなり。（中略）汝なんぢがあふて見度みたしと思ふ女のねんごろにする男

ふところの懷の中に入れば、その男の魂ぬけ出いで、汝なんぢ仮かりに其男に入れかはり

て、相手の女を自由にする事、又なき楽しみにあらずや」と云へ

ば、頗る便利なる軀身すこぶと云ふべし。爾来大豆右衛門、色を天下
 に漁ぎよすと雖も、迷宮めいきゆうに似たる人生は容易に幸福を与ふるもの
 にあらず。たとへば巻一の「姉あねの異見耳みみ痛いた櫛かたぎ木枕まくら」を見よ。
 「台所より飛びあがり、奥の方を心がけ、襖ふすまのすこし明あきたるあ
 ひよりそつと下りて大座敷へ出、い（中略）唐更紗たうざらさの暖簾のれんあげて、
 長四畳ながよでふの間を過ぎ、一だんたかき小座敷あつて、有明ありあけの火明
 らかに、是これぞ此家このやの旦那殿だんなの寢所しんじよならめと腰障子をすこしつき
 やぶりて、是より入つて見れば夫婦枕をならべて、前後も知らず
 連れ節ぶしの軒いびきに、まづないぎ（中略）先内儀の顔をさし覗のぞいて見れば、其美そのし
 さ此器量こので三十ばかりに見ゆれば、卅五六でもあるべし。なるほど（中略）
 男は三十一二に見えて、成程強さうな生れつき。さて扱さは此女房の

美しいに思ひつきて、我より二つ四つも年のいたをもたれしか、
 但^{ただし}入^{むこ}り聾^{むこ}か、（中略）と亭^{てい}主^{しゅ}が懷^{ふところ}にはいればそのまま魂^{たましひ}入れ替
 り、（中略）さあ夢さましてもてなしやと云へば、此女房目をさ
 まし、肝^{きも}のつぶれた顔して、あたりへ我をつきのけ、起きかへつ
 て、コレ氣ちがひ、爰^{ここ}を内ぢやと思ひやるか、夜の更^よけぬ先^ふに往^い
 にや／＼と云ふに、面白^{おもしろ}うもない歌留^{かるた}多^たをうつてゐて夜^よを更^ふかし、
 今からは往^いなれまい、旦^{だん}那^な殿^{どの}も大津祭^{おほつまつり}に行^ゆかれて留^る守^すぢやほ
 どに、泊^{とど}つてなりと行きやと、兄弟^{かたじ}の忝^{かたじ}けなさは何^{なん}の遠慮^{えんりょ}もなく
 一所^{いしょ}に寝るを、姉^{あね}をとらまへ輕^{きやうこつ}忽^{たち}な、こりや畜生^{ぎやうぎ}の行儀^{ぎやうぎ}か。
 こちや畜生になる事は厭^{いや}ぢやいの。（中略）多聞^{たぶん}悪いと畳^{たたみ}を叩^{たた}
 て腹を立てる。扱^{さて}は南無^{なむ}さん姉ぢやさうな。是^そは粗相^{そさう}千^{せん}万^{ばん}、

(中略)と後^{あと}先^{さき}揃^{そろ}はぬ事を云ふて、又本の夜着^{もとよぎ}へこそこそはい
つて、寝るより早く其^{そこ}処^{ところ}を立ち退^のき、(下^げ略^{りやく})」(この項未完)

(大正十三年六月)

青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第四卷」筑摩書房

1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行

1979（昭和54）年4月10日初版第11刷発行

入力：土屋隆

校正：松永正敏

2007年6月26日作成

2010年10月30日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

w.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

案頭の書

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>